元亥

四

汲

手

授

へ13
3045
3

3045
3

両剣奇遇巻之三

第五回

織部変名見竜佑
山懸振勇縛安信

八文字屋

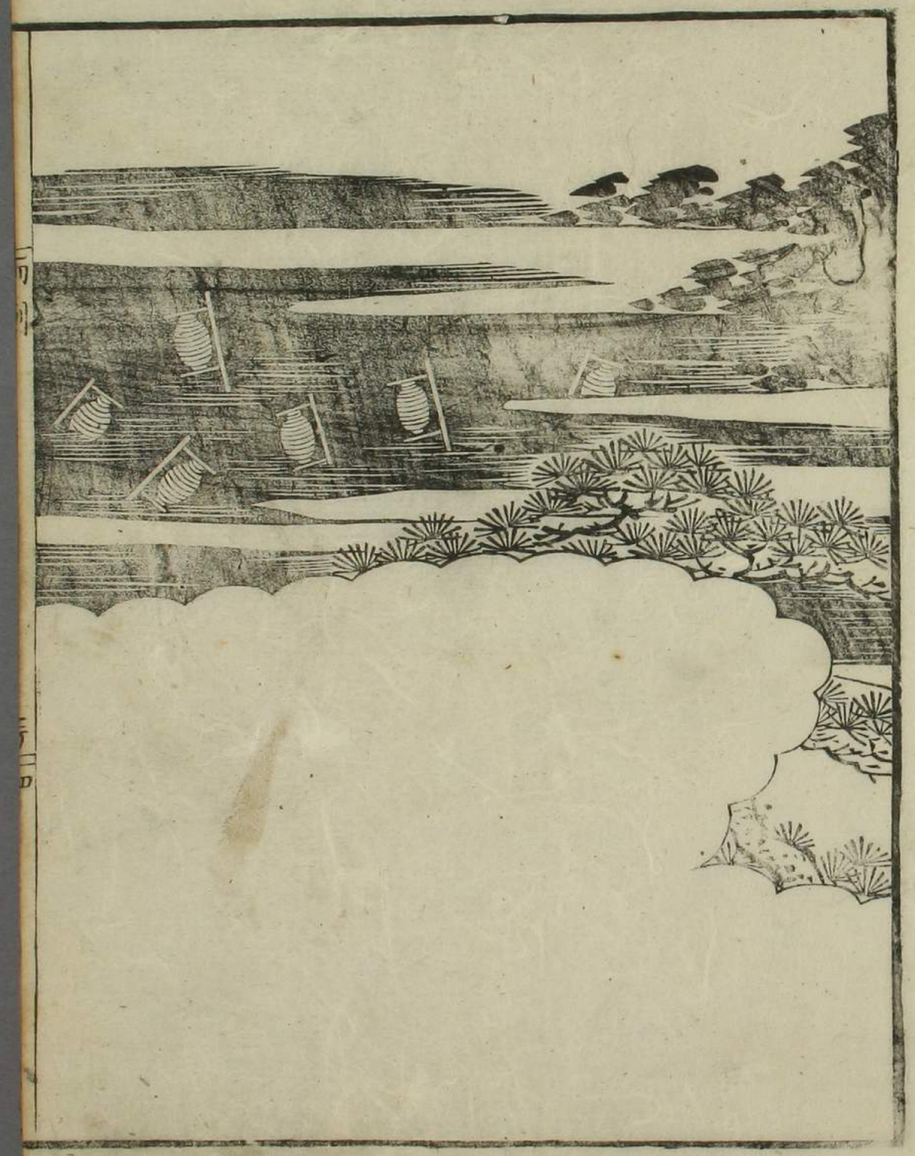
おくて岬八織部ニ不死しうと思ひ峠ニて死骸をあらはバ
大ハいつ不死骸ハ、いつで朱ひとる事ハ
なるべ恐しきと雖ども織部自身ハ
篠宮殿ハ事ハ一生あ芝東を斬ち敵を討うと言
つて呼りしいつまさ海を回り一角も始て徹の
事物をそなへまちく帰伏の思ひをなと橋東もひとり
金烏の剣を小八郎ハ白見ともなる神色をあ〻く教多の堂類
を集めん天下を騒ちんと嚢中の物を探るとも安し人今

拵をかせて徒の侍を助くるを織部こゝろよく思
正信濃の両人が酒肴國物巧んなる山名細川の家臣なるゆゑ殺害
せ内ハ信濃海ゆるべしと拵をもて強てこゝにまゐる
西宮左大将と偽りて諸所をめぐるにて亦死こゝろを
思ハせんと心便りよかるべしとかくもかひしといつも両
人ともに理りて伏を対平蜘蛛の姫宮ハ父を結ハ学問の
文かりこと今までおもひ居るまゝ織部を父乃敵なりと知るゆゑ
を嘆さんとこゝ織部が即ち女ながらも討ん拵
ひとりこゝろ強んとを実んとせ内織部むこゝ起りこハ
ちはやき拵暴うれしくひざ笑ひ膝みしてこゝを奪ひ

こゝ心のまゝ沖の方遠の後をさせんと腰を
刺殺さんとこゝろ那ゝが沖弾きこゝ出織部みすゞ付
ひもく俺なるゆゑ酒よりこゝ織部こゝ人牧も滴ていく
西興福寺と名づけて山駿も君西宮殿よりこゝ西を
こゝを奴郷なれバ山猪と諸ゝ織部左馬と部屋に使ひ
輿丈の部こゝ人ゆくべき者二人ゆくこゝ拵の血まと
ゆゝて毒二の味方と那ゝ用意して結りけるハ見紙拵こ
毒をすゝこゝ山立織部白き衣服を宗の拵黄とこゝ
京物小紙乗ゝ折のこゝ諸威風巍然ゝて大時
高貴の官人と見へ小ゝる山駿猪ハ雑掌社仲こゝ
左大臣付こゝ長刀皆義を持いつもこゝ花美を毒ゝ

先摂州にて数箇所を領ずる赤松尾張守範佑が居城に
いたり橘左少将安貞の使者として西宮左大将山度内勅を齎らす窃に
よ云の枕なすにより暫く城内に入て慰恩いたし度よし述
ければ範佑もさしひかへ入来ある帝の寵臣なれば
咎めて疑ふ所なき様にもてなしく家臣に命じて自ら門前に
出迎へば程なく織部ハ客間の中より範佑与へ会釈して城内
に入ければ本丸の上座を設し一間に招ずるに辞する迄なく
志川くと菌のよふハ座しければハ山懸一角も刀を携て侍り
候し橘左少ハ次の間に控へ居るに範佑席を改て旅途
の労をねぎらひ来臨を辱ることを謝し兼日の密事を述
事く鴛を追ゆる乃様を遂に免許しまして演あるに織

部かくいふ僕此度所々を遊歴せしハ宝剣と称する稀なる
まてども雲ハ帝近く霊夢を占ひて異人より希代の宝
剣を得玉ふ名を玉兎と号く是を佩玉ふ時ハ玉体
を護して疾病を除き帝徳を助く宇内を太平ならし
むよしなり雌雄の剣あつて雌剣ハ今いふ玉兎雄剣ハ
金烏と名付て鍔かしらに金烏を鐫付られん離合ハ天数
あつて金烏の剣ハ暫く西方なる武夫の手にわたるよし
みだりに帝威をかろしめ奉る者あらバ其人を意伏を
ずして可なれバ竊に金座として御身を巡行せしめ
探索して是を探り求め奉れバ遂に雌雄の剣相合せべく
しかも夢中異人の教へしに任せ僕辱くも綸命を蒙り



義経主国に告げ知らせるべき武かの答礼奉して庶民
乃黒ひとけるべきを屠り吹雨丑く引き連れと世を披
義経京都を出るより南部三郎信の中に
此剣を持ち着きひつぎ弓矢探ぐ弓矢を上へ
右衛門と称く百年奮戦と賀古ら来る物書
を出して寄せ合ひ範佑道で領兼一山海の孫経を連れ酒
宴をもつけ客膳を慰せんとて程くの答礼踏る範佑平日
浮く散楽を好きりぐ山抑も支丹独る者を招集
城外に着き桟敷をかまへ無礼をなせ辱を辱めて
安剣を抜きもはひのぎや相紀すべき間み計能と雷鳴ふ
入べきの如ひのうんと対佐ふ両くふ御中のうち

時ふ忍ぶ始るべうんと宮人ハ清幕を垂屏ひのうまと
かやく中央の機敷に織部と称ぶれば両人も着徒て共ふ月猶
を沖の様変ハ範佑近臣数人を列をふ〻ひ〻くう踏士の
卒宮を警護一近里の庶民男女物をひの市ハ男女
幡の如く集り已ぐ程に文養の衣徒と異て園乃富
饒なるをひのうを至美の楽の徒ハづまも寄を見め如を垂く
羅紗ひ鼓笛乃奏りる調ひくおろく異人く感賞一
朝和乃時ふ始ふ〻ひ教書るあぐ落日男ふく陸ぐまる
ふて範佑ぐ舊臣に安陪八郎晴連ふ者あしぐ強力霊猛
なるふ清盛を程ぐて主を敬ぐ夫敬部屋の振舞ひの
市ハ範佑怒くあ対法臣ふる中にて主ひ乃非

ゐるを演さんとするに叱咤して扇を翳し眉間を叩きければ晴蓮面目
を失ひ、其後ある勇士を嬰児の如くいふまで恥しめらるゝとて
大いに安からずと大に憤り白晝に忠義して總国に仕へんことを
求めてとしこの性質乃暴戻なるを悪く更に隠と称せその
なく飄泊して連縁の苦しみおのれで忽ち悪心を萌し四五
を害して眼を滑かんと数百の侍を窺ひしに晴ゝ列ねて
塲乞に林中に身を潜め散楽見物の帰るさを伺ひ待しに
かくとハ志らず乾佑ハ何心なく馬上にゆらかなるを弓射て
其つびひ大唇腹のわたいひるや其ぶさを始めて射切る髑
あるたにいまだ縁び落ちる時八諸侯大に驚騒しすハ主君を
討る曲者つらめ遁さしと尋ね探る松明星の如く

廣野を照し数百人狂ぎの如く馳遠へバ晴蓮逃るべき所なく
狼藉をもして棒ちう所業玉来る者を蹴踏し蹴跆さんと
ま村立らんとするに呼る声のしずせぬ精兵とく矢取く数人を射たり
矢種つきれば大刀を抜て群がる中へ縦横に斬て回る勇猛わ
とかく手負死人数多に及ぶと不斬抜りく見へたりしに
織部ハ五町餘りさしに進み一寸せハ体をひやし山懸に打よ
ちまくに棄るべきハ今に必得たれもかゝく其体を見
晴連勇気に擁る性質なりまだ遠かいゆくさひ目を忍しく
して見るに其へぞいつか加勢せんと様の役立るとて踊り
出ん彼ひとて生けりしは我しらず晴連も支持を對手
母物る連へ一勇気も折けれ不楽く譲ぐ刀を持落し

紙今は雅なる文をつくり縄を清はらくかめくに波のうつて苑佑
が敵なる方を謝し雪月の程を感じ晴運を引きく城内う
ゆりある機関ふ群臣のつまり富貴して主人不慮の横死
ゆゝしくかくハ家智お續乃和ひかゝハ妻ハ失意病とみなま
へ拙家していそゞ家門ふ嗣君を迎へんといふ外ハ鄉部ハ
横死のことをふく軍佑さかさるの横死宮部の面く悲傷ふ
らんと弔慰の詞を宣ふ老臣ふ古まを祥附し範
佑横死をかなして家智お續を大樹へ和ひ込まを信盛鄉
詞の段踏動の沢茅と源宮みなゝ下さまを拙と称ふ
ふとしまとしはよく記我のふ物くけまを九遠ふ者を通じ
ゆまバ鄉部源ゆず主法所を巡行なすを金烏の剣を

弱水る勅人作ふくるゆ大樹ふも関宮あつまく西武乃
改乃吉兎を又ふ耳て妻ハ告知すてと紛まるゆ
踏動の沢茅とつゝて詞ゆ事ひくふ家断絶も天命
のまゝ下むゆ不ふまバ是非横死とかゝ和お續の後
ひくゝ川てハ却くゝ上城佑の乗法ゆ沢とゆ
又小声ふなまくゝ者のゆふく返まをバ法官大ふ面武をんゝ
付賄のとゝ乃ゝバ法官ふ平ん拙を祖ふくゝ世ゆば必定
徳つまて遠平ふ費用ふ事かくまゆ平語すゝ古兎ゝち
兎沢河のゝくゝ乃平ひくゝふ面みゆゆ法官大ふ面武
ゝをすまくゝさ面くゝ乃感ふ和ゝ乃ゝ少ゝまを鉄刑ゝくく
行衛ゝ美重百枚を古ゝまゝ立酒の事面ゝば拙ゝ怪び

はからずも山懸様へも黄金十枚にて縁を与へ下部にても扶持
しくれたる趣有りけれど織部忽ち詞を和らげ是一言にて
数代勲功ある赤松の一族を敵として滅亡させんも不仁なりとさ
まざま諫めれば今まで陰謀の事を穏便にして是より
先かゝる始末なりし情ある返答におのづから恥ぢて悪心
を謝しにける織部が常業にて出づる尼崎の方へおもむき
けるぞ是非なき次第にて数十人警護して数代先の道
を遂げけるとかや

第六回

織部棄興取鯉魚
雪江忍恥為娼婦

織部が常業にて尼崎に到りければ城主細川伊勢守

政元近く招きて昵懇ましく互に織部はおのづから勅使
となりて剣を捧ぐる趣を見て演説を述べ政元感悦して
織部に命じて麻布の法にて異向しめる事三日遅延し
ければ織部兼ねて漁猟を除くなれど海上に逍遥して
釣をする事なく山懸も彼と小船を求め又簾を垂れし大
なる楼船を出し浦辺の漁父数十人を召集め攬船多くあ
つめ事を好みし海天晴れて蒼波漸く雲なく
はるかなる遠近の布帆白鳥の如く見え眺望甚だ絶景なれば
政元も同船して漁家を召し漁父船をこぎまはして
大網を下させ鮮鱗とび躍りて十分の漁利ありけ
れば織部も其日は家に帰り鉤をたれて日もすがらなりしが

舟をつくり城辺の川に入り尺斗りの鯉魚水面に浮き出
でらく遊泳し漁父網をおさんとすれども水深くして網を
深く沈めて所をさぐれども鯉の在ることをしらざりし
漁父嘆息して

金鱗珠眼徹清流　変化何時藻底留
潑剌破波應考感　飛騰蹴浪作仙遊

と自ら鯉を詠じ詩を吟ずれば遠近も風雅の堂にうたれて
高吟して佳作作り稱する時始の鯉魚又舟のあち向にこの里
に帰くうろこ多く漁父網を下すこと多しと雖ども漁父は
命し亟自ら舟端に出て竿を水に垂れ釣をもとめ投げ
あるいはやまざる鯉の頭をくだくこと甚だ多くひらいて

ひてこれを陸に載せ鯉を載せ城に入り城辺の
釣人竿を垂れ釣を鮒にくれ水面にうつるを舟に
あるを見もとめ山水深くあり城中に入り釣も酒肴を
庖人に命じこれを割むに奇物に珍味なるこの
玉は光を放ち掌中に弄して見れば玉は照水
玉と呼ぶ鱗の掌中にあるが如くこれを
手にとりて鱗の渕とこれを水底の砂をもとめ世にたぐ
ひなき宝玉なりこれを秘蔵せしに
七年山の如く遊びし時水底を照し
自ら釣を垂れ如何にこれを玉を持る
ぐ勿ち水底の者を多く入れ尋探しむ

さらば宝玉を求得ども之にしたがひ恍惚と高宝を失ひしと申伝へけれ
ば白きつけず無ひ手に入りてよりて城井須守織部にも
これを給はり貴卿先例の如くかやうに幸を得らるる黄金
五千枚銀百貫を贈りて謝礼とのべ且清盛の錦を与へらるる
これより帝におかせば又橋松公を浮べく明ら宝庫まで海路を送ら
れ別に近く極めて細き織部山清兵衛して十日ばかり逗留ましく
帰るべしと云しが二十日余りにおよびし丈夫に奉公なるをまでばかりにして
おりふし娘当時にと使ひ一人の僕をつれて二條より橋本まで
来る大路の辺に白日鹿をとどめし内に当時某の辺りを通りて冷やかなる
風すすめる事のごとく定めて人影も見えるは置べからざる
おやしきてわが内の人に尋めまでも以て知る人なし書の

河を行ば我れたぞのわづらいかくべく父の詞をとらせんと思
ひしに顔は行燈の火を袖にてかすかに照しける其苦痛に
しられて娘は小紫の影ある事を思ひける所でひとまつかれかと
案じ入る事を寄せべるを見れば父が幸の儀なる新よりも見えるやうに
此便りと見てもかくて八行といふ様にやといふに其をくと言ふに
小紫は父が橋氏へやつの事を知る人に語るがあらの日比思ひを遣んと
娘もとよりて部屋に到り時に橋氏多くの人と使ひて何ぞと八郎
まで橋本と事を見ければかかる所へ細く新を書しに人の家
談を相手にて事をふさぎて内にも主の事を語りがたるべしとあり
し所に遠くきこえ橋本が遣はした者しかなく袖をとる
わが宿の目前にて往来の人もなきにいふまでも角をらう

もかつてうくあるべき宿りとおんと僕よりあつまる藩鎮いばく
要と為る都も相貌おそれ大漢四人出来り藩の婦人
宿年せんさの所をとく神吉の江ごとくあるもろもろ僕好くこと
ハ稽古ならもしぶるに彼少年大まそひ熱ハ吉めび来
いつるまで旅人の残室を待ものこゆるまぐさし世のいつ西さ
さんと次の又と引めるすぬ僕を始の紙幣しも仏ど法とも顧
きして函まる神ハ文監物よ大人を重衡を学びかたし
ゆすきとうがひるまを移し城をもつ熱どもど投身ろろ石ろ
て部よ庇つさ血を流しおろ寺住ぬる婦人るいぐ西藩
とつまに力を抜く斬刺るよ志ばいのらひられた吉刀乃
神孤よ面隠ぬく偽ものを敷きし天四刊

勿よ彼ひ来つまける吉の江ハ是とろろうあるを話ちて注解
びに神を敷をし城ハ声立させどく抜る布を吉れ江ご新り
出そ日を塞ぎこハつまる海りて厳く抜ようかんと扉みけと
ぶぶぐくさぶぐくおりよ冥黒をもんと思ふ対人行まくく
寥くく鶴凄きし新の行ぐぬやにあ西立ける入いる程小迎後
らんとすすもも孤吳ろんバ行ぐこハぶ我んよはひるぶよれよりる色
ろく南よ神吉ぶ抜ろくバ脱こに斬言て刀を試んと敷又
罷人を表ろろぶ如く小置る吉の江ハ沼蔵よ探されんろう自
宮とぶくとふひくぐも父の歌獄神と対ん志もあろ是ハ脱お母
の歌ろまでぶ行ぐむひそて敷ろんと対くぶろりくく小海とくぶめ
さくバ伯の如くんの使ひくぶくくとあくあ部みゆくくあるを

かくばかりたのしくくらすなかに賊ども是を嗅しり強盗となりてうち
よせ此の窟におし入奪ひ取らんと夜陰に乗じて是を将ゐて来りしが
得物を携へ群来の者なりしが酒宴を催して是を待居し
と大かる樽盃をいだして酌かへし飲ひ歌ひ宴のうたへの聲を
きゝて喜び酔ふしたる所を害せんと席にまじり酌をし給仕に務め六を
合せ媚をなしてさらにうちとけぬ盗賊どもいよいよ無心に入りし
くをよろこび酒人あまた腰白布とりとさまざまのすがたに見なしまつく
なりし大酔しいづれもこれまゝ庭に倒れ臥て鼾雷のごとく
すさまじかりしかば時よしと此時によくねいりたる刀を抜放し
母をともに此時賊の頭を刺殺さんとすれば驚き起上らんとすれ
ども叶はずしてまゝに息絶ければ快く刀をおさめて縁に置し

隙に窟を逃んと見廻せども盗賊ハ一人も是を知ず先に賊頭を
殺しつるに逃べき足もて扉をおしあけ見れバ折しも秋の月隈
なく晴わたりて生茂りたる草葉にすだく虫の声すみて
露きらめくも清き光を輝かしつゝ見廻すに一筋の細
き路ありいづくへ行くとも知れぬ道なれど是を辿りて走り行に
漁の里人の来るかと心細くもいそぎしに広き川辺に
いでたる早朝ますらをの早くも来りて網引する朝の薦に
一艘の舟をつなぎたる是を見れバ舟に押乗り
伸して一人の男面を出して此方を見る賊の手に捕られ
まじと思ふ所の者なれば急ぎて是を頼み一人里
ひとり行方ハ何処なるや語りくれよといふに彼男黙然として

梅もいろいろきつのかぜ先片敷て入て体を人清ちは途をて行
かぐ〳〵舟中我のみにあらず婦人も同じく苦をまぶ苦しかるまじ
るる人里のあるを遠てまつもとんと情ある詞を心ゆしして喜を謝
し京人まぶ中丹は多の織よりて紀州ぶ男二三人
雪屋一多くの児女の只ふるを入るを乗ぶたを舟屋
よりてもう故人実永やんいつものあるて再び乗紀州
詩の聞とのぶて虎の只ふを人の男ひとかを織ハをとめてぶ
よりて徳付ふて言の江ふも只ふを入てかあ井ふ永ぶ
ふるぶ書て絵を紀をぶて行て潮ふを海を
るるて人あの永ふうーの色あいるる永ふ一まりやんとを
あるるを二ふを絵て人家建つぎ織ひふる清ふ舟織た

なぶ一つの大なる家ふとも男女あまをみて奥ハ色行
の声ふて言ふる人のりて西織ハ主の書おぼしき人と
同じく書の江と一百ふ所ふ住ひ仲ん寄しふるひふ
詩多の人を見て織ハ論ゆきけまバ主の書ハ言の江を過く
招き見ハ都の人をえん文ハ播州室の津みて彩雲が遠
こを論を色バ心細をおハ主ん俳人をふ娘ふひふ多い
ふふ多ん絵衣を色粧ひをつふ内を弟井をとめく
あそび人事ふ中ふて酒を矢ひ手をたかぶる書人
ふる位のおもひりて舟ふ上船を幸を求ふふ家部の
声業をふて人あたまを書ふと詞を巧みふすけまバ
言ふハ論ふ論面のぶ中流ふ人をぶふを屋

うくは貪欲にふかく淫色女子に費しも家をあのめて、ひそびとなりん
恥しめられ薄命の据く今こそハ家を作りんとおもひ窮て目の中ハ
ほわらぬ伴ふのみそ那し浄穢に及び縊死せんと志し隠風深くけし結
切ほしくバ害に怨死を主まで病立て来て介抱しまづ死てよろかけ
徒然なる財を取り失ひん色にほ中すく花に重き衣練は人を助
て心をゆるさバ何事も遂げざらんまでに死すまで小なるく論方那を結びつくらんひ
へしてようやく亡父老の病小路に帰り来ての本に市まで都に帰
かへるひ都識郡が行状を身持にさきなんと発する心生じ帯し
夫婦が互に相まく転をつくり仏事を営ひ所着婦女の態を学ぶるふ
主も悦び容貌艶麗なる事教にけれはやがて出名の物頭と成べく悦び
名

両剣奇遇巻之三終